

図式的投影法を用いた母親の家族認識 (1) — 原家族に対して —

小林麻子*・稲越孝雄**・会沢信彦***

Mother's Perception of Her Birth Family Using Schematic Projective Techniques (1) — Experiences with Birth Family —

Asako KOBAYASHI, Takao INAKOSHI, Nobuhiko AIZAWA

1. 問題と目的

核家族化、少子化が進んだ現代日本の家族において、育児は厳しい状況に置かれている。まず、核家族化によって育児の経験的知識や技術が世代間で伝達されないという現実がある。多くの母親は、孤立した状態の中、自らの経験と知識だけで子どもを育てていかなければならない(柴野, 1995)。さらに、少子化によって、自分の産んだ子どもが初めて体験する子どもである母親も少なくない。赤ん坊を抱く姿もぎこちない母親が、地域社会との繋がりもなく、親元からも離れた場所で、育児書を頼りに子どもを育てているということは決して稀ではない。

しかし、現実の育児は育児書通りには進まない。思い通りにならない子どもを前にした時、母親が選択する対応は、意識的にせよ無意識的にせよ、母親自身の経験から呼び出されたものとなる。家族の中で育った母親は子どもという立場ですでに育児を経験している。こうしたことから母親の子ども時代の家族経験は、現在の子どもへの対応に何らかの影響を与えていることが予想される。

そこで、本研究では、家族の中での母親の経験に着目する。家族の中に生まれた子どもが成長し、結婚、妊娠、出産、育児を通して、母親になっていく過程をたどりながら、その中で経験したことが家族との関係や子どもへの対応にどう影響しているのかを考える。

調査には水島(1978)が考案した図式的投影法を使用した。図式的投影法とは、カード、円形

* こばやし あさこ 文教大学生活科学研究所客員研究員
** いなこし たかお 文教大学名誉教授/東京成徳大学非常勤講師
*** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部

駒、針金などの簡単な材料を一定の規定・形式に基づいて配置させ、被験者の内面的状態や特定の対象に対する感情などを図式に表現させるイメージ的投影法である（草田，1998）。上杉（1984）は「イメージ理論は、われわれのイメージが現実の世界を基盤に、記憶作用を通して、また思考活動の結果を含み、さらに感情や欲求などを含む全体験的なものとして成立するものであることを明らかにしている。イメージとして成立する図式的投影法の作品もまた、現実世界の論理的概念的な理解と解釈を含み、同時にそのように理解された世界に対する感情、被験者自身の様々な欲求を含んだものであり、その表現である」と述べている。

本研究では母親の主観的世界を扱う。人生のある時点、あるいはある場面で、何を感じ、その状況をどのように解釈したのか、母親の体験的世界を捉えようとするものである。「その時」「その場面」が設定でき、実施が簡単であるという利点もあるため、図式的投影法は本研究の調査に適していると考えられる。

本稿では、母親の幼少期から青年期について扱う。図式的投影法を使って、母親が育った家族の様子を語ってもらう。具体的には、母親が比較的想起しやすいと思われる、子どもと同じ年頃（3～5歳）、10歳頃、18歳頃の3つの時点を設定する。それぞれの時点の家族関係単純図式を作成し、当時のことを語ってもらう。母親が当時の家族の中で感じていたことを、母親の成長と共にたどっていく。

2. 方法

(1) 調査協力者

都内私立保育園の父母会と埼玉県内の育児グループに依頼。応じてくれた、東京、埼玉に在住の3歳～5歳の子どもをもつ母親8人を対象とした。

(2) 調査期間および実施場所

実施期間は2000年9月から11月にかけて。実施場所は調査協力者の都合に合わせて、調査協力者の自宅、調査者の自宅、本大学院の実習室となった。

(3) 調査方法

人生のステージごとに質問項目を設定し（表1）、その項目について図式（家族関係単純図式、カード式自己像単純図式）を作成してから（図1）、当時の家族の様子を語ってもらう。質問は幼少期のものから現在まで時系列に提示する。面接中の会話は録音し、逐語録を作成。面接所要時間は平均4時間であった。本稿では、子どもと同じ年頃の家族、10歳頃の家族、18歳頃の家族について作成してもらった家族関係単純図式を対象にする。なお、代表的な図式的投影法には以下のものがある（草田，1998）。

① 家族関係単純図式投影法

B5判の白紙縦の中に、直径10cmの円枠を作る。家族一人一人の円形の駒（1円玉大）を円枠の中に置いて、被験者が認知している家族関係をイメージ的に把握する。

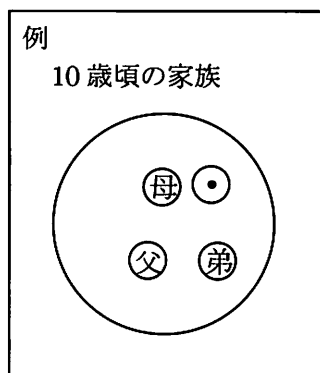
② 自己像単純図式投影法

B5判の白紙縦を台紙として用いる。上から2cmの位置に対象カードを固定する。対象は特定の個人、集団、「自然」「外界」といった概念まで適用できる。1円玉大の円形コマを自己の核、針金を自己の枠として規定し、対象に対する自己像を作成させる。

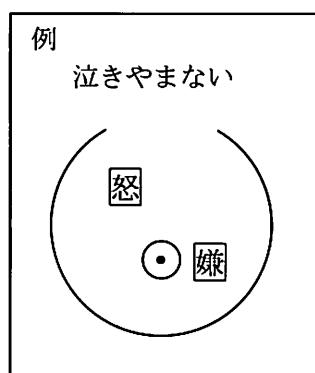
③ カード式投影法

表1 質問項目一覧

ステージ	質問項目	ステージ	質問項目
1 子どもから 青年期	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと同じ年頃の家族 ・10歳頃の家族 ・18歳頃の家族 ・18歳頃 母 ・18歳頃 父 ・青年期の友人 	4 幼児期 (2歳頃～5歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか寝てくれない ・ぐずぐずする ・飛び跳ねたり叫んだり暴れたり ・私の言った通りやってくれない ・かんしゃく ・おもらし
2 結婚から出産	<ul style="list-style-type: none"> ・新婚時代 ・妊娠を知った時 ・妊娠後期 ・子どもが産まれたとき 	5 第二子以降	<ul style="list-style-type: none"> ・第二子以降の妊娠を知った時 ・第二子以降の出産後
3 乳児期 (0歳～1歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> ・初めて目が合って微笑んだとき ・どうしても泣きやまない ・私の作った離乳食を食べてくれない ・後追い ・抱っこ 	6 現在	<ul style="list-style-type: none"> ・夫 ・子ども (ひとりひとり) ・現在の家族 ・理想の家族



家族関係単純図式



カード式自己像単純図式

図1 調査で使用した図式

B5判の白紙縦の中に釣り鐘型の三層からなる枠を作る。上から2cmの位置に対象を描いたカードを置く。感情語（Pultchik, R.の感情8語を漢字1文字に置き換えたもの「喜、悲、望、恐、愛、嫌、怒、驚」を用いる）が記された感情カードを、その対象に対して配置する。本研究で使用したカード式自己像単純図式は、自己像単純図式に感情カードを併用した複合図式で、対象に対する自己像とそれに伴う感情を表現してもらう。

3. 結果

表2 母親のプロフィール

	年齢	原家族	職業 結婚前／現在	現在の家族
A	30代前	父・母・妹（3歳下）	教員	夫・長男（7歳）・長女（5歳） 次男（0歳）・姑
E	30代前	父・母・妹（3歳下） 弟（8歳下）	会社員／なし	夫・長男（3歳）・長女（3歳） *双子
F	20代後	父・母・長兄（4歳上） 次兄（2歳上）・祖父・祖母	職歴なし	父・母・次兄・長女（3歳）
G	30代後	父・母・弟（3歳下）	研究員	夫・長女（3歳）

調査には8人の母親が協力してくれたが、紙面の都合上本稿では4人の結果について分析を行った。母親のプロフィールは表2の通りである。

母親が作成した家族関係単純図式を図2に、母親が語った当時の家族の様子を表3に示す。さらに、図式どうしや、図式と母親が語ったものを比較するために、図式の駒同士の位置や年齢による駒の動きの変化について分析を行った（表4）。これらをもとに、筆者が感じたそれぞれの家族のイメージを記述する。

(1) Aさん

・子どもと同じ年頃（5歳頃）

父母は重なりあって、子ども同士も重なり合っているのに、親子は離れている。しかも親子の間には距離を感じる。「絶対的な父とそれを立てる母」ということから、母は父の方を向いている印象を受ける。母は父のことで忙しく、そんな父と母の様子を本人と妹が寄り添って見ているようにも受け取られた。「家の居心地は良かった」というので、この状態で調和は取れていたのだろう。

・10歳頃

父母の位置は変わらないが、本人と妹が少し両親に接近する。本人と妹が成長した印象を受けた。また、妹が本人に並びつつあるのは、精神的に近づいてきたことを表しているのかもしれない（Cf. E10歳頃）。

・18歳頃

母は少し上がり父は少し下がって同じ高さになる。母は父を立てなくなって「父を批判する」ことも。妹も上がるが、母との距離は縮まらない。本人は下がって家族から離れる。妹は進路のことで母と対立、本人は「一歩引いて見ている」。自分の価値観を押しつける母に立ち向かう妹と、家族から離れる本人。父が母から離れているので、父は母と意見が違うように感じた。

(2) Eさん

・子どもと同じ年頃（3歳頃）

図式はAと似ているが両親と子どもの距離が近く、こちらは父母の間に本人がいるという印象を受ける。

・10歳頃

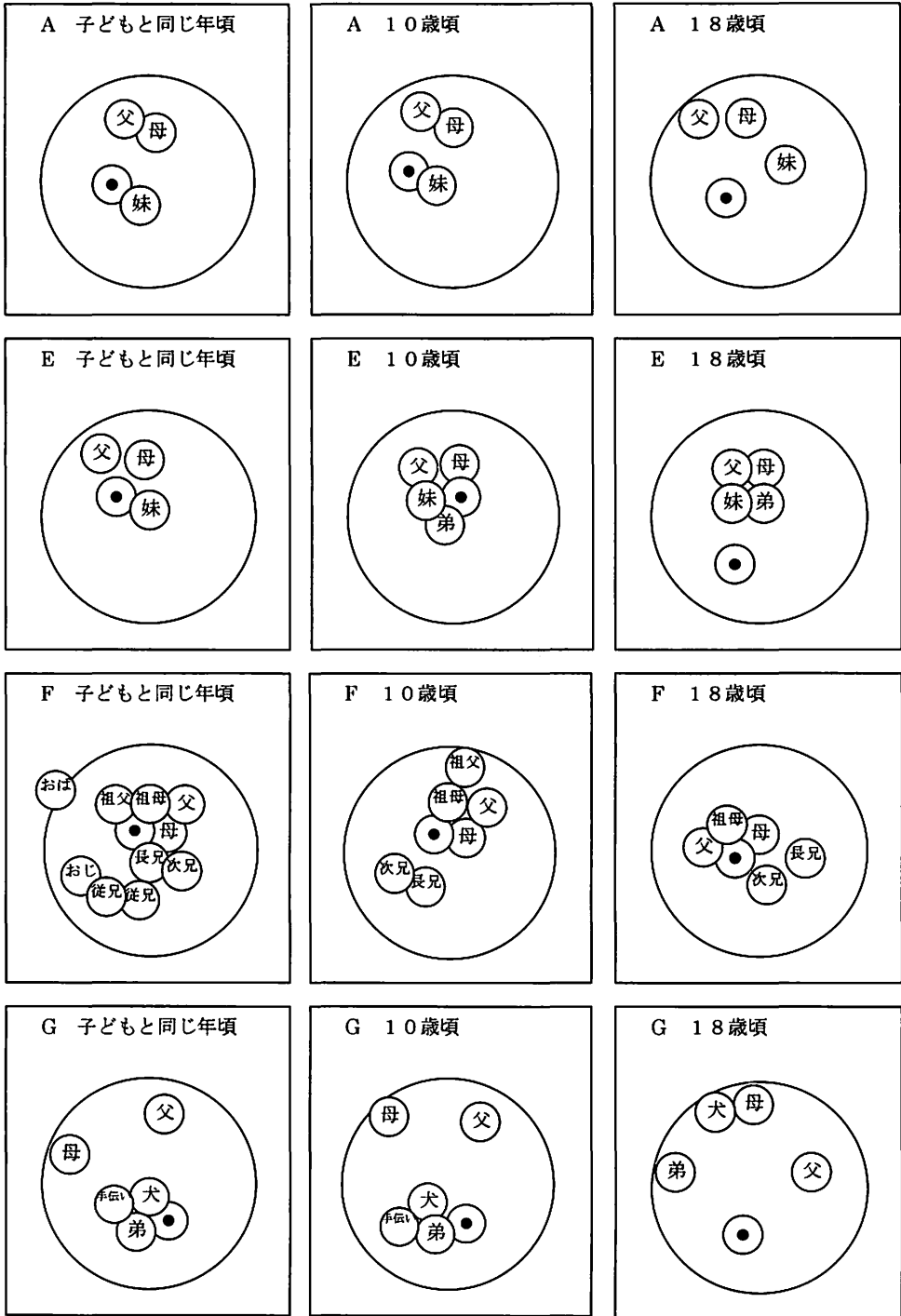


図2 母親が作成した家族関係単純図式

表3 母親の年齢ごとの家族認識

	家庭の様子	印象に残っていること	
A	5歳頃	絶対的な父とそれを立てる母。私の後に妹がくっついてきて。居心地はよかったと思う。これが私の家。	茶の間でみんなでアイスクリームを食べてる。
	10歳頃	両親のイメージは変わらない。妹が私の上に重なってじゃまくさいという思いと、でも遊びに行く時は結構一緒に行ってたから。私がかっついて行ったこともあったし。	妹と全員集合見てる。共通の話題があって、けんかもいっぱいしたけど。
	18歳頃	一步引いて見ている。妹の高校入試でもめている。私と妹もちよっと離れて。お姉ちゃんは私の気持ちなんてわからないのよって感じだった。父親を批判する母。家族はバラバラのことしてたけど、私には家族よりも大切なものがあったから別にこんなものかなって。この頃家に居たくなかったかな。	
E	3歳頃	お父さんとお母さんがいて自分がいて、記憶にはないけど産まれたばかりの妹がお友達のように、時には嫉妬していたかもしれないけれど自分の下にひっついてる。おもちゃのように思ってたのかも。	両親にどこかに連れて行ってもらっている。お弁当当げて食べているイメージ、外で。ピクニック。
	10歳頃	お父さんとお母さんがいて、自分がいて妹がいて、歳のはなれた弟がいて。10歳になると妹はきょうだい分、友達のような関係、そこにかわいい弟、自分より下っていう。弟が一番下でみんなにかわいがられているイメージ。外より家の中が好きだったかも。	よく妹と私、妹と弟でけんかして、よくうるさいと叱られた記憶がある。
	18歳頃	(自分が) 離れているのは、家を出て寮に入ったという意味。外から家族を見ている気分。寮と家が近かったのでたまに帰りたくなった。自分の居場所がなくなるとは思わなかったし、いつでも帰れる場所のような感じ。いきなり帰って違和感を感じることはなかった。本当に家族ででかける。今でもそう。	偶然街を歩いてこの4人に会って「おーい！」ってやったことがしばしばあった。でも帰る場所は違う。
F	3歳頃	一番近いのは母と祖母、祖父。父は仕事が忙しくてほとんど家にいなかった。下の兄とはけんかばかりで怖いイメージ。上の兄がよくかわいがってくれた。隣に住んでいたおじと従兄、みんなに愛してもらったという本当に幸せな子ども時代だった。	祖父の機嫌が悪い時、ご機嫌取りをして来いとみんなに言われたこと。祖父が私を膝に乗せ私の落書きを替めてくれたこと。
	10歳頃	小2の時、祖父が倒れた。亡くなる小5まで、母と祖母は病院を行ったり来たりで、バタバタしているイメージ。以来何でも祖父の用事が優先。9～10歳頃、旅行がダメになった時、思い通りにならないこともあるんだと思ったことが、家族について一番大きなこと。祖父が亡くなった時、死ぬってこういうことなんだなって思った記憶がある。	
	18歳頃	父ともいろいろ話ができるようになっていた。私のまわりに母と祖母と父が、その時介護が中心だったので祖母をはさんと母と父がいる。2人はつながっているというイメージがある。長兄とは高校の時けんかして、それ以来距離を置いている。次兄とは大学の時は一緒に話し合ったりすることが多かった。	祖母が亡くなった。半分寝たきりで、母が大変そうなのが印象に残っている。

	家庭の様子	印象に残っていること	
G	3歳頃	単身赴任の父は自分の世界を持っていて、母も自分の世界を持っていて友人もいて。弟と私と犬は、特に大きな帰属意識はなかったので家の中でゴロゴロいる。それをお手伝いさんが面倒見て。お手伝いさんが母と直列にラインになって母代わり。犬と弟と私はひとまとまり。でも小さい分弟と犬は母に近いところにいる。	弟がお手伝いさんにヨーグルトを食べさせられて、私は本を読んでいたか一人で遊んでいて、庭には犬がいて。
	10歳頃	海外で一緒に住んでた。距離感は近くならなかった。母は何か勉強して出かけることが多かった。やっぱり犬がいて、弟と私とお手伝いさんがいて。母と父が遠くなった理由に言葉の壁がある。自分とは別の人という意識を強く感じる。父との関わりはない。自分の楽しみ優先で、子どもと一緒に遊び方を知らなかった。お手伝いさん（現地の人）は厳しかった。でも好きだった。	家の壁はあるが、落ち着いていられる状態。母も父もお手伝いさんも音だけで、犬と弟も気配だけで、私は勝手に本を読んでいる。でも今日は家の煉瓦の中にみんないる。
	18歳頃	みんなそれぞれバラバラで、犬は弟と母の間を行ったり来たり。（私が杵の端にいるのは）真ん中がない。杵は自分のまわりにある。家族も友達もみんな外。いろんな杵が、家族の杵、友達の杵、～の杵が、いろいろな所に出来たり消えたりする。常にある杵は自分のパーソナルスペース。家族という杵がない。みんなバラバラという。弟の友達の家族がベタッとしている家で、それに憧れて「暖かい家をつくるんだ」とかいろいろ暴言を吐いて。父母は「家が暖かくないって言うの！」弟は「違うんだよ！」って一生懸命説明しようとしていたのを覚えている。	私は自分の部屋に。弟も自分の部屋に。母はいない。父もいない。

妹は本人と同じ高さに並び「友達のような関係」になる（Cf. A10歳頃）。弟が家族に加わって家族の距離が縮まる。歳の離れた弟の成長を家族中が一緒に喜んでいて、心が一つになっているように見える。「弟はみんなにかわいがられている」というが、家族の中心にはこない。本人の下にくっついてきょうだいの固まりは崩れない。両親がきょうだい3人に平等に愛情を与えているから、きょうだいはひとつと感ぜられるのだろう。

・ 18歳頃

本人は就職して家を出ている。本人が抜けても家族の形が変わらない。本人が家を出ても家族の関係は変わらず「いつでも帰れる場所」と感じている。外から一人家族を眺めている図式から、家を出たけれど心はまだ家族から離れられないという印象を受けた。

(3) Fさん

・ 子どもと同じ年頃（3歳頃）

大家族。これだけ家族がいても、それぞれの場所があってつながっている。母が中心でそこに本人が重なる。祖父母・父の段と母・本人の段と兄たちの3段になっている。円杵上のおばは亡くなっているのだけど、本人の中では家族としてまだ存在しているように感じる。

・ 10歳頃

祖父は病気で入院するが、祖母でつながっている。亡くなったおばは円杵上にあり、祖父が円

表4 母親の作成した家族関係単純図式の分析

	子どもと同じ年頃	10歳頃	18歳頃
A	<ul style="list-style-type: none"> ・父母と子ども達がそれぞれペアになって離れている ・父母と子どもは接することがない 	<ul style="list-style-type: none"> ・父母と子ども達の距離が縮まった ・妹の位置が上がって本人に並んで来た 	<ul style="list-style-type: none"> ・父母の高さがそろい、離れる ・妹の位置が上がってきて本人を抜く ・本人は下がる ・本人は妹と離れる ・家族同士の接点がなくなる
E	<ul style="list-style-type: none"> ・Aと似ているが、父母と子どもの距離が近い 	<ul style="list-style-type: none"> ・弟は本人と妹の下にくっつく ・妹と同じ高さ→姉妹というより友達 ・弟が入って父母と子ども達の距離が縮まる 	<ul style="list-style-type: none"> ・本人が家族から離れる ・本人が抜けても家族の状態は変わらない
F	<ul style="list-style-type: none"> ・大家族 ・母と本人を中心にみんなが繋がっている ・おばは円枠の上→他界している 	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父は本人から離れる→入院 ・祖父は祖母を通して本人に繋がる ・祖父は円枠にも接している ・兄たちは家族から離れている ・母/本人/父/祖母の形は変わらない 	<ul style="list-style-type: none"> ・祖母をはさんで父と母→介護のため ・父と接する ・父/母/本人/祖母が固まって次兄に近づく
G	<ul style="list-style-type: none"> ・本人と犬と弟とベビーシッターがひとまとまりになっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・犬が少し本人から離れる ・同居しても父との距離は縮まらない 	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の位置は変わらない ・本人と弟が離れる ・家族同士の接点がなくなる

枠に接しているのは、何か死と関係しているように感じる。本人・母・父・祖母の形は変わらない。兄たちとは仲が悪かったわけではないと言う。本人の意識が家族に向いているから母や父や祖母とくっついているのかもしれない。

・ 18歳頃

祖母が病気になって段が崩れてしまった。父は母と並び祖母を支えている。本人も母・父と一緒に祖母を支えているように見える。本人が父と接する。「父といろいろな話ができるようになっていた」ことから、父と接していると実感できるような体験があったのかもしれない。

母の隣から下に少しずれる。本人は末っ子なので少し家族の中心から離れると言う。意識が家族から少し離れた印象を受ける。大学生活が始まり、同じ大学の次兄に近づいている。

(4) Gさん

・ 子どもと同じ年頃 (3～4歳頃)

(父は単身赴任で不在) 本人に重なる犬の存在は大きいのだろうか。本人は「犬と弟と私はひとまとまり」というが、身を寄せ合っている印象を受ける。お手伝いさんが母との接点になっていたと言う。

・ 10歳頃

父の仕事のために、弟が1歳の頃家族で海外に移住。家族の関係は変わらない。ベビーシッターは現地の人で、本人と弟に厳しく、でも良く接してくれたと言う。本人と弟は生活も言葉もネイティブと変わらなくなってしまったため、両親との間に言葉の壁も出来てしまった。前回の図

式では、母がベビーシッターを通して間接的につながっているようにも見えたが、今回は、子どもたちの生活と親の生活が分離している。

・ 18歳頃

弟と本人が離れて家族はばらばらの状態になる。駒の配置については、真ん中がない、回転しても変わらないと言う。枠は自分のまわりであってみんな外にいる。家族という枠はないと言う。しかし、10歳頃の家族の印象に残っている場面は、私は一人で本を読んでいるのだけど家族の気配を感じて、壁はあるけど落ち着いた状態、今日は家の煉瓦の中にみんないるというもので、家族が一緒にいる安心感や、家族の枠組（煉瓦の家の中）を感じる。弟は友人の家のような暖かい家庭に憧れていたという。本人は、ベタツとしていては困るけど、気配ぐらい感じあえる家族を望んでいたのかもしれない。

4. 考察

図式は母親の主観的な世界を表しているため客観的な基準で判断できないが、それぞれの駒の位置関係と母親の話から、筆者なりにその世界を理解しようと試みた。今回、母親が作図を作成する中で気がついたこと、感じたことをいくつかあげたい。

- ・ 全体的な印象として、最初の図式で家族の位置が決まると、後の図式はほとんどの場合次々に出来てしまう。ここから、母親の中には家族の明確なイメージがあることが予想できる。
- ・ (A, E, F) 全ての作図の中で、母駒の位置が変わらない。(E, F) 駒を貼る順番を見てみると、最初に母駒を貼っている。ここから、A, E, Fの家族イメージの中の、(原家族の) 母親の存在の大きさが想像できる。母駒の位置が決まって自己の核の位置、あるいは他の家族の位置が決まってくるように感じる。
- ・ (A, E) 円枠の上下に意味を持たせている。自己の核の下にずらして妹駒をつけているが、年齢ともに妹駒が上がってきたり、母が父を立てなくなると、母と父が並んだり (A)、年齢的なものだけでなく、精神的な部分でも駒の上下の動きは関係しているように感じた。
- ・ 18歳頃になるときょうだいとの関係が変わってくる。くっついていたきょうだいと離れたり (A, G) 離れていたきょうだいと近づいてきたり (F) で興味深い。親駒と接することのないA, Gの場合、きょうだいと離れてしまうと家族が本当に「バラバラ」になってしまうことを、図式をみて実感する。

図式の説明を聞いて感じるのは、母親が具体的なある場面を想起していることである。したがって、駒の位置、重なり具合の一つ一つに意味があることが説明を聞いてわかる。駒の配置に工夫が凝らされている。それぞれの図式を作成した後に話してもらった印象に残っている家族の場面は、生き生きと表現されていて、母親の心の中にある家族のスナップ写真を見せてもらっているような思いがした。図式を作成することで、母親のイメージが活性化されているという印象を受けた。

本稿では、家族関係単純図式投影法を使って母親の原家族に対する認識についての調査を行った。調査者の価値観や枠組みにとらわれることなく、母親の家族や育児に対する思いを聞きたいと考えていた。今回、母親の主観の世界をわずかではあるが垣間見ることができたように感じる。ただ、水島（1979）が指摘しているように、「全体」としての「生きた」「主体」のとらえ方の姿

意性、了解・記述のみに終わるといふ問題は残されている。図式的投影法を調査や研究の中でどのように位置づけていくかが今後の課題である。

引用文献

- 草田寿子（1998）. 図式的投影法 岡堂哲雄（編）現代のエスプリ別冊 心理査定プラクティス（pp.114-125）至文堂
- 水島恵一（1978）. 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ 文教大学紀要, 12, 1-11.
- 水島恵一（1979）. 「体験と意識」研究の方法論 体験と意識に関する総合研究第1集, 1-8.
- 柴野昌山（1995）. 現代のしつけの状況 柴野昌山（編）しつけの社会学（pp.278-302）世界思想社
- 上杉喬（1984）. 図式投影法とイメージ 水島恵一・小川捷之（編）イメージの臨床心理学（pp.190-196）誠信書房